

## 文献紹介

西ヶ谷恭弘編 日本城郭史学会編集協力

『国別 城郭・陣屋・要害台場事典』

東京堂出版 2002年7月

A5判 667頁 本体6,800円

日本の城郭に関しては、全国にわたって網羅的にカバーした大類伸監修『日本城郭全集』全16巻(人物往来社)が1967-69年に、児玉幸多・坪井清足監修『日本城郭大系』全20巻(新人物往来社)が1979-81年に出版されており、1988-90年刊行の木村礎ほか編『藩史大辞典』全8巻(雄山閣出版)も関連文献といえる。ほかにも、城郭探訪ブームを反映して、古地図・空中写真を含む数多くの図版を収載した一般書も次々と出版されている<sup>1)</sup>。かかる状況の中で、1冊本の事典たる本書を、いわゆる城郭研究者の範疇に属さない評者が敢えて本誌に紹介するのは、従前の類書と異なる以下のような特色を有しているからである。

すなわち凡例によれば、「本書は明治維時の城とこれに類する施設を国別にまとめた事典で、(1)「城持並大名以上の居城はもちろんのこと、無城格大名の陣屋、旗本および交替寄合の陣屋、代官陣屋、……外様大名領国内(の)特殊な城構、……徳川幕府および徳川一門の……城構の代官所、奉行所、支城」を対象とするのみならず、(2)「江戸時代後半、とりわけ幕末に幕府および海岸を有する諸大名が築城した砲台場(台場)を国別に集大成することも、本事典編纂の大きな目的である」と記されている。

このうち(1)の点に関していえば、従来の類書が古代より近世初頭に至る間に存在した城郭に数多くの頁を割いていたのに対し、本書は近世の小規模な広義の城郭・防禦施設に多くの頁を割いており、その方面に興味を持つ近世歴史地理研究者にとって便利な1冊本の辞典といえる。

しかし何といっても、本書の特徴は(2)の点にある。まずは編者による「はしがき」から少し長いが引用したい。

「従来城郭遺跡でありながら、明治維新時に築かれた新しい時代のものとして、海岸埋立てや護岸工事、道路建設等により東京オリンピック前後から…何の抵抗もなく消滅してしまった砲台場跡

である台場を大きく扱ってみた。台場は軍略上の拠点にあることから、その跡地は要塞として改築され、第二次世界大戦時まで陸軍省所轄であったものも多く、従来の城郭関係の書籍では取り上げにくい存在だったことも背景にある。…しかし幕末に築かれた箱館奉行所である五稜郭・品川台場・神奈川台場・戸切地陣屋等を見て、城郭とはみない、とはいえないのではないかと思うようになった。これらは誰がみても大砲主体の要塞で、堅固な城郭と映る。」

このような編者の意図は、彼が執筆した「近世の築城施設—幕末・明治維新時を中心に—」と題する40頁に及ぶ総論でも、下記のようなその章立てと頁配分から容易に窺い知ることができよう。

緒言……3(頁)

- (1) 城と陣屋を構えた大名家……4
  - (2) 無城大名と交替寄合の陣屋……6
  - (3) 天領陣屋について……8
  - (4) 陣屋と城の特例……10
  - (5) 大名領国内の築城と御殿・御茶屋・関所……13
  - (6) 台場築城について……17
  - (7) 台場の形式・構造について……21
- まとめにかえて……38

この総論の中で多くの頁数が割かれた台場に関する(6)(7)では、稜堡式築城と大砲主眼の海防に尽した人たち、台場築城の主な研究、台場築城の経緯、台場の形式的変遷、台場の立地と砲撃方法、台場の構造—その平面プランから—(第Ⅰ期～第Ⅴ期)、といった項目のもとに、多様な出典から多くの図を挙げつつ、個別台場の全体的位置づけがなされている。この総論を単独の完結した論文としてみても、内容豊富で教えられるところの多い総説的論考といえよう。

本書の本編ともいべき国別の個別城郭解説は、蝦夷地にはじまり、陸奥国から大隅国まで68ヶ国を経て琉球で終る611頁が宛てられており、日本城郭史学会メンバーを中心とする42名の執筆者により分担執筆されている。見出し項目の採否は各国担当者の判断に委ねられたそうであるが、編者の意図に添うべく、160頁余りが台場の解説

に割かれている。国や藩ごとに従来の研究・調査の進展状況が異なるためであろうが、解説にかなりの精粗があるものの、台場ごとの平面図や藩ごとの一覧表も豊富に収載されており、編者が「はしがき」に記す「幕末・明治維新時の築城実態の解明」や「従来の城郭研究の視座の再検討」に大いなる示唆を与えてくれる。

城下町・陣屋町をはじめとする囲郭都市ないし囲郭集落を調査する中で西洋式星型囲郭の特異性とそのルーツを探索しつつある評者にとって、本書のような内容の事典が刊行されたことは大いに有難い。しかし、本書は上述の紹介文に記すように、歴史地理学界の関係方面の研究者にとっても有用と信ずるので、一冊備えられるよう推賞させていただき次第である。(戸祭由美夫)

#### 注

- 1) 城郭というよりも城下町に重点を置いたものとして、シリーズものでは『太陽コレクション・城下町古地図散歩』全9冊(平凡社, 1995-98)が、一冊ものでは『日本の名城 城絵図を読む』(別冊歴史読本91, 新人物往来社, 1998)が代表的といえよう。

### 武内和彦・鷺谷いづみ・恒川篤史編

#### 『里山の環境学』

東京大学出版会 2001年11月

A5判 257頁 2,800円

近年、日本の各地で里山の保全が注目されている。評者は霞ヶ浦の水質改善に関わる市民活動に参加しているが、その活動においても里山の保全が関心事となっている。高度経済成長期を通して、湖岸の人工化や流域の都市化などによる環境変化の結果、霞ヶ浦でも著しい水質汚濁が見られた。水質浄化を推進するためには、湖沼流域の環境保全が重要な課題とされ、当該市民団体では里山の水質浄化機能にも注目し、生物多様性の維持とともにその保全を提言している。

里山の保全が語られる場合、里山の定義と性質が重要になる。本書では「人里近くに存在する二次林や二次草地」を里山として限定しており、「その周囲にある農地、集落、水辺などをあわせた二次的自然地域」を里地としている。里山の多くは二次林として丘陵地や台地に見られ、谷津田などの里地とともに人間とのかかわりを通して維

持されてきた。燃料革命などにより里山の重要な機能が失われ、里山の管理が長期間にわたってなされていない場合が多い。今日、里山の面積は宅地開発などによって減少しており、里地でも二次的自然としての農村的機能が崩壊しつつある。本書は、里山の持続性が二次的自然である里地の維持によって保障されるという観点から、里地維持の重要性を評価するとともに、生物資源に依拠した循環型社会の再構築を提言している。

本書の構成は、以下の通りである。

第1章 里山の自然をどうとらえるか

第2章 里山の変遷と現状

第3章 生物多様性の宝庫としての里山

第4章 里山を守る新しい試み

第5章 生物資源としての里山の可能性

第6章 里地自然を保全するための長期的戦略

本書の執筆は、東京大学大学院農学生命科学研究科の3人の編者を含む専門が異なる16人によってなされ、(財)日本生命財団の特別研究助成による研究課題「“里地保全戦略”の構築——総合的・計画的な里地の保全をめざして」の研究成果としてまとめられている。各章が独立した研究内容である傾向がみられ、節ごとに執筆分担がなされている。

第1章においては、第1節で里山と里地の定義とそのとらえ方を、丘陵地や台地の里山と谷津田の景観から示し、第2節で保全生態学の視点から、石器時代以来の里山における植生管理の変遷を、生物多様性との関係から述べる。第3節で市民運動による里山の保全・管理の実際と意義を述べ、第4節で環境行政による里地自然への政策が述べられ、本書全体の方向性が示されている。

第2章では、第1節で「全国スケールでみた土地利用の変遷」が述べられ、「日本における里山面積の推定」がなされている。「地区スケールで見た里山の変化」として、多摩丘陵南部の荏田近辺における土地利用の変化から丘陵地型里山の変遷と新田開発以降に武蔵野台地に残存する台地型里山の変遷とが比較されている。第2節では、明治初期の迅速測図等から里山の面的変化を把握し、多摩丘陵鶴見川流域が樹林地の面積を減少させつつクヌギ・コナラ林へ変遷していく要因を述べる。第3節として、京都盆地のアカマツ林が野生ツツジの里山に変遷していることから、照葉樹